世界名作劇場

小公女セーラ

プリンセス

『深夜のお客さま』

第 14 話

制 作　日本アニメーション
　　　　フ ジ テ レ ビ

脚本　中西隆三

登場キャラクター

セーラ・クルー	島本須美
ミンチン院長	中西妙子
アメリア先生	梨羽由記子
ベッキー	鈴木三枝
アーメンガード	八百板万紀
ラビニア	山田栄子
ジェシー	飯塚はるみ
ガートルード	佐々木るん
モリー	向殿あさみ
ジェームス	郷里大輔

渡辺菜生子

（ロッティ）

エミリー（人形）

シーザー（猫）

1 高架鉄道橋のある風景（朝）

ボウッと汽笛を鳴らして画面を横切る蒸気機関車と列車
——通過すると、彼方にミンチン女学院の裏側が見え、
拡大する。

2 ミンチン女学院・台所（朝）

戦場のような忙しさ—— トーストを焼くモリー、それ
を篭に盛るベッキー、湯気の立つ大鍋をかき廻すジェー
ムス、うろたえるセーラ。ジェームスが鍋をおろす。

ジェームス「さ、こいつを運ぶんだ！」

セーラ「は、はい……」

急いで、鍋を持とうとするが、

セーラ「あつッ……」

熱さに思わず手を離す。

ジェームス「チッ、お嬢様育ちで鍋なんか持った事がないってのか……けど、ここで働く以上、これからはそうは行かねえぞ。鍋でもこぼしてみろ、勘弁しないからな」

セーラ「は、はい、ジェームスさん」

ベッキー「あの、私が運びますから」

ベッキー、鍋を持つ。

セーラ「あ、有難う、ベッキー」

モリーがパン篭を突き出す。

モリー「さ、生徒さんたちは、もう揃ってるんだよ。お前は早くこのパンをお運び！」

セーラ「はい、モリーさん……」

3

同・食堂

大鍋を抱え持ったベッキーと、大盛りの焼きパンの篭を抱えたセーラが入って来る。
既に、席についてお喋りしていた女生徒たちが、一斉にセーラを見る。
その中で、ロッティたちのテーブルで、大鍋のオートミールをつけるベッキー。
セーラは、大テーブルのジェニファからパンを配りはじめる。ダイアナに配り、アーメンガードに配る。
セーラと眼が合い、何か話しかけたそうにするアーメンガード。
セーラ、無言でドルシアに配り、ラビニアに移る。配ろうとした一瞬、ラビニアがツンと皿を小突く。はずみにパンは弾かれて床に落下――

セーラ「あッ……」

ラビニア「なにするのよ！」

キッとセーラを睨む。流石に怒りをこめて見返すセーラ

―― アーメンガード以下、一斉に成行きを注目する女
　生徒たち。

ラビニア「あんたが落したのよ」

　セーラ、無言でパンを拾う―― その手が怒りに震えて
　いる。

ラビニア「なによ。そんなパンを私に食べさせる気? 取り替えなさ
　いよ」

　懸命に怒りを抑えてラビニアを見るセーラ。見守って囁
　き合うジェシーたち。

　その時、ミンチンとアメリアが入って来る。一斉に挨拶
　するラビニアたち――

一　同「お早うございます、院長先生」

ミンチン「お早う……(見廻してセーラに気づく) そこでなにをして
　いるのです」

セーラ「は、はい……お早うございます、院長先生」
ラビニアがぱっと立上る。
ラビニア「院長先生、セーラが私のパンをわざと床に落したんです」
ミンチン「なんですって？」
セーラ「いえ、あの……」
ミンチン「セーラ……お前はもう生徒ではないのです。友だち同志のような意地悪は許しません。ラビニアにお謝りなさい」
セーラ、ラビニアを見たが、仕方なく黙って頭を下げる。
冷笑するラビニア――
一方で、大鍋を手に立尽して見守るベッキー。
ミンチン、改めて一同を見渡す。
ミンチン「皆さんにも、改めて云っておきます。特に用事のない限り、今までのようにセーラに話しかける事はなりません……セーラ、さあ、早く、食事の用意を……」
セーラ「は、はい……」

セーラ、別のパンをラビニアに配り、ジェシーたちに廻って行く。
冷笑するジェシー、ガートルードたち。
心配そうに顔を見合せるダイアナ、ジェニファァ、リンダ、クリステルたち。
アーメンガードは、茫然とセーラを見つめ——一方のテーブルでは、ロッティが泣きそうな顔でセーラを見守っている。

4 同・台所

ジェームス「なに、パンを落したって?」
前に、セーラと、離れてベッキー。
セーラ「す、すみません、ジェームスさん」
ジェームス「フン、落した奴は、お前が食べるんだな」

代りのパンを竈に放り込む。

5

同・ドアの外

出て来るセーラとベッキー。

ベッキー「お嬢様……私、見ていました。悪いのは、お嬢様じゃありません、ラビ……」

セーラ「有難う、ベッキー、もういいのよ」

そこへモリーが来る。

モリー「さあさあ、それが終ったら、授業が始まる前に教室を掃除しとくんだよ」

セーラ「はい、モリーさん……」

6

同・教室

ガランとした教室で、机を拭いているセーラ。
——振鈴の音。
ドアが開き、ラビニア、ジェシー、ガートルードたちが入って来る。
ラビニアたち、セーラを見て、冷笑して囁き合うと、ラビニアの席へ——
続いて入って来るダイアナ、ジェニファ、リンダ、クリステルたち。
拭き終ったセーラ、壁に行くと立てかけたモップを手に出て行こうとする。
ラビニアの席を囲んでニヤリと頷き合う三人——ラビニアが、石板の粉をコンコンと机に落し、セーラに呼びかける。
ラビニア「待ちなさいよ！」
セーラ、振返る。

ラビニア「なによ、このお掃除のしかた……石板の粉が一杯じゃないの」
セーラ「でも……そこは今拭いたばかりよ」
ラビニア「じゃ、ここへ来て見てごらんなさいよ」
セーラ、仕方なくモップを置くと、その席に近づく。
――白く落ちた粉の線。
ラビニア「ほら、これでも拭いたばかりだなんて云えるの？」
セーラ、凝然とラビニアを見る。
心配そうに噂き合うジェニファたち。
ラビニア「さ、早く拭きなさいよ」
セーラ、屈辱に耐え、ラビニアの机を拭き直す。
ニヤリと顔を見合せるラビニアたち。
ジェシー「ね、この席、誰の席だったか憶えてる？」
セーラ、手を停め、ジェシーを見る。
ガートルード「ほら、あんたの席じゃない、代表生徒だった時の……」

セーラ、ガートルードを見返す。

ラビニア「今は、私の席……」

ジェシー「あんたに代って、代表生徒になったラビニアのね」

ラビニア「(冷笑) セーラ、これで私とあんたが、どんなに差がついたか、よく判ったでしょ」

じっとラビニアを見返すセーラ。

その時、アメリアがフランスししゅうの道具を抱えて入って来る。

一斉に自席に戻るラビニア、ジェシー、ガートルードたち。

一瞬その場に取り残されたセーラを、アメリアが困惑したように見る。

アメリア「セーラさん……」

セーラ、アメリアを見る。

アメリア「あの……皆さんと一緒にいたい気持は判りますけど、もう、

あなたは、教室に出てはいけないんですよ。院長先生に叱られますからね」

セーラ「はい、アメリア先生……」

セーラ、入口の壁に戻ると、モップと水桶を手にとる。

ほっと一同に向き直るアメリア。

アメリア「さ、今日はフランスしゅうを教えてあげましょうね」

わっと女生徒たちが歓声をあげる。

7 同・廊下

その歓声を背に、モップと水桶を手に出て来るセーラ、吐息して歩き出す。

その時、二階の階段から遅刻して駆け降りて来るアーメンガード、はっと立停る。

アーメンガード「セ、セーラ……」

8

同・地下の作業室

セーラも、思わずアーメンガードを見る。

アーメンガード、うろたえ、口ごもる。

アーメンガード「あの……あなた……お元気？」

セーラ「え、ええ、なんとか……」

アーメンガード「あの、私はとても元気……」

セーラ「そう……」

アーメンガード「あの……あなた、とても不倖せなの？」

セーラ「（吐息）私に話かけない方がいいわ……さ、行って！」

アーメンガード「セーラ……」

セーラ、すり抜けるように、モップと水桶を手に、地下への階段へ消えて行く。

茫然と見送って立尽すアーメンガード。

——一方でじっと見守っているベッキー。

水桶をおろすセーラ、吐息する。続いて入って来るベッキー。

ベッキー「お嬢様……アーメンガードさんもアーメンガードさんですわ。お嬢様が不倖せになった位判っている筈ですのに……」

セーラ「いいのよ、ベッキー……あの人は、思っている事をうまく口に出せないだけなの。きっとそうよ」

9 同・ラビニアたちの部屋（夜）

ベッドに坐って、独り落ち込んでいるアーメンガード。

どっと笑声がかぶる。

× × ×

一方に集っているラビニアたち――

ラビニア「全く、あのセーラが、ダイヤモンドプリンセスと呼ばれてたなんて嘘みたい」

ジェシー「ほんと、みすぼらしい恰好しちゃってさ」

ジェシー、ミンチンの真似で、ガートルードに、

ジェシー「セーラ……お前はもうベッキーと同じ、台所メイドなんですよ！」

咄嗟に、手桶とモップを手にしたセーラの真似をするガートルード

ガートルード「はい、申訳けございません、院長先生……」

どっと笑うラビニアたち――

× × ×

離れた自分のベッドで、背を向けて坐っているアーメンガード――泣いているのか、その肩が小刻みに震えている。

× × ×

ガートルード「ミジメねえ……」

ラビニア「私、最初からセーラを好きじゃなかったけど、この頃のあ

の子ったら、我慢出来ないわ……ものも云わないで、ひとの顔をじっと見たりして……」

ジェシー「この学校にいるのが嫌なら、さっさと出てけばいいのよねえ」

ガートルード「お情けで置いて貰ってるくせにねえ」

その時、一方にクックッとアーメンガードのむせび声が聞える。

ラビニアたち、振返る。

×　　　×　　　×

肩を震わせているアーメンガードの姿。

×　　　×　　　×

顔を見合せて、ニヤリと肩をすくめ合うラビニアたち、ベッドから立つと、アーメンガードのベッドにそっと忍び寄る。

ラビニア「アーメンガード……」

びくっとアーメンガードの肩が停る。
ジェシー「なんで泣いてるのよ」
アーメンガード、首を振り、泣声で答える。
アーメンガード「私……私、泣いてなんていないわ」
ガートルードが廻り込んでアーメンガードの顔をのぞき込む。
ガートルード「わあ、泣いてる泣いてる……」
アーメンガードの眼から涙——
ガートルード「ほら、大きな涙が鼻の頭を伝わって落っこったわ、あ、もうひとつ……」
ジェシー「判ったわ……あんた、また勉強が出来ないのが悲しくて泣いてるのね」
ガートルード「この学校で、一番出来ないんですもの」
ラビニア「それとも、もうセーラに勉強を教えて貰えなくて、それが悲しいから?!」

アーメンガード、泣顔で振り返る。

アーメンガード「そ、そうよ、私、悲しいのよ……でも、勉強が出来ないから悲しいんじゃないわ……ほっといてよ」

わっとベッドに泣き伏す――

顔を見合せて肩をすくめるラビニアたち。

ラビニア「さ、ご注文通り、ほっといて寝ましょ寝ましょ」

ラビニアたち、それぞれ自分のベッドに戻ると、燭台のローソクをローソク消しで消し、毛布に潜り込む――

（中　CM　）

10

同・地下作業場（夜）

皿洗い場で——山のような鍋や食器、皿を洗っては、棚に片附けているセーラとベッキー。
ジェームスが、大あくびで肩を叩きながら入って来る。

ジェームス「フワッフワッフワッ……やあ、今日は馬鹿にくたびれたな」
ふと、セーラたちに眼を向ける。

ジェームス「なんだ、まだ片附かんのか……モタモタしてると夜が明けちまうぞ」

セーラ「は、はい、ジェームスさん」
モリーが入って来る。

モリー「さあさあ、早く片附けないと、灯りが勿体ないよ。院長先生は、油代にだってやかましいんだからね」

セーラ「はい、モリーさん……」

ジェームス「はい、モリーさん、はい、ジェームスさん、か……返事だけは、相変らずのお嬢さんと来やがる」

モリー「それが困るんだよ。いつまでもお嬢さん気分でいられたんじゃ、こっちだって使いにくくて仕様がないんだからね」

ジェームス「フフ、違いねえ……じゃ、明日からもっと厳しくこき使ってやるから、そのつもりでいな」

笑いながら出て行くジェームスとモリー。

見送って、顔を見合せ、吐息するセーラとベッキー――

11 同・ラビニアたちの部屋（夜）

一つ残った燭台の灯りの下で―― すすり泣いていたアーメンガードが、ようやく顔をあげると、ラビニアたちのベッドを振り返り見る。

――寝静っている三人のベッド。

アーメンガード、そっと傍の赤いショールを取ると肩に
羽織り、燭台をとる。

12　同・地下作業場（夜）

辺りの掃除を続けるセーラとベッキー。

ベッキー「お嬢様、あとは私がしますから、お嬢様は先にお部屋へ戻
って下さいまし」

セーラ「でも……」

ベッキー「いいえ。お嬢様は、お部屋へ戻ってからも、独りでお勉強
をなさっていらっしゃるんですもの」

セーラ「え、どうして、それを……」

ベッキー「（微笑）私、存じてたんです……お嬢様が、皆さんに遅れ
ないよう、独りでお勉強を始めていらっしゃることを……」

セーラ「まあ……」

ベッキー「さ、あとは独りで出来ますから、これをお持ちになって……
……」

火のついてない燭台を手渡す——

セーラ「ベッキー……」
ベッキー「私、嬉しいんです。お嬢様が、不幸に負けずに勉強なさってる事が……本当に自分の事みたいに嬉しいんです」
セーラ「有難う、ベッキー……！」

13 同・三階の廊下（夜）

燭台を手に——階段を上って来るセーラ。

× × ×

——ミンチンの部屋のドアの下から、微かに灯りが洩れている。

× × ×

セーラ、そっとその前を通り、奥の扉へ向う――

14 同・屋根裏への階段（夜）

暗い急階段が照し出され―― 燭台を手にしたセーラが登りはじめる。

15 同・屋根裏部屋の前（夜）

階段を上って来るセーラ――
自室の扉に向おうとして、はっと足が停る。
―― 扉の下から、洩れている灯り。
セーラ、思わず脅えて呟く。
セーラ「だ、誰かいるんだわ……」
ためらったが、そっと扉に近づき、ノブに手をかける―

――思い切って引開ける。

16

同・屋根裏部屋（夜）

ギキッと扉が開き、セーラが立つ。

× × ×

はっと、木箱にエミリーを抱いて坐っていたアーメンガードが、涙顔を向ける。

× × ×

驚くセーラ――

セーラ「アーメンガード……！」

アーメンガード「セ、セーラ……」

アーメンガード、急いで木箱を降りると、部屋に入ったセーラに駆け寄る。

アーメンガード「私、来たのよ……やっとの思いで来たのよ……」

セーラ「アーメンガード……こんな所へ来たら、どうなるか判ってい
　るの？」
アーメンガード「ええ。判っているわ、院長先生に見つかったら、ひ
　どく叱られるってことくらい……でも、かまわない
　の……私、来ないではいられなかったの……」
セーラ「アーメンガード……」
　アーメンガード、すがるようにセーラを見る。
アーメンガード「ね、セーラ、云って……もう、私を嫌いになっちゃ
　ったの？……私、もう、あなたの親友じゃないの？」
セーラ「そんな……」
アーメンガード「だって……だって、あなたったら、あんなに冷たい
　云い方したんですもの……私、それが悲しくて……
　ずっとここで泣いていたのよ」
　アーメンガードの眼に再び涙が溢れそうになる。
　セーラ、優しくアーメンガードの肩に手をかける。

セーラ「そんなつもりではなかったのよ、アーメンガード」
アーメンガード「え？」
セーラ「さ、一緒に坐ってお話しましょう」
アーメンガード「あの、私を追い返したりしないの？」
セーラ「勿論よ……さ、どうぞ」
アーメンガード「え、ええ……」

セーラとアーメンガード、ベッドに並んで腰をかける。
セーラ、アーメンガードを見つめる。

セーラ「私ね、アーメンガード……今だってあなたを嫌いになってる訳ではないのよ」
アーメンガード「え、ほんとに？」
セーラ「（頷く）でも……でも、色々な事が一ぺんに変ってしまって……そう、あなたとだって、もう今までみたいなお友だちではいられなくなってしまったのよ」
アーメンガード「ち、違うわ……私、変ってなんていないわ……だっ

て、話かけても、私から逃げようとしてるみたいなの、あなたの方ですもの……私、どうしていいのか、頭の中がメチャメチャになって……」

セーラ、じっと考え、吐息する。

セーラ、アーメンガードを見る。

セーラ「そうね……変ってしまったのは、私だけなのかも知れないわ」

セーラ「でも、院長先生は、私があなたたちと話す事だって、あれ程嫌っていらっしゃるのよ」

アーメンガード「え、ええ、知ってるわ」

セーラ「だから……だから、私……あなたも私なんかに近づかない方がいいと思って……」

アーメンガード「そ、そんな……私、あなたと話せなくなってから、まるで病気みたいだったのよ……それで、ラビニアたちが寝ちゃうのを待って、やっとここへ来たの……あなたに、もう一度お友だちになってって、お願

いによ……」

セーラ「アーメンガード……」

セーラ、感動してアーメンガードの手をとる——

セーラ「有難う……私がいけなかったわ……あなたって、矢っ張り、素晴らしいお友だちよ。いえ、今まで以上に、私の大の親友だわ」

アーメンガード「セーラ……嬉しい！」

夢中でセーラにすがりつくアーメンガード

その時—— 階段を登って来る足音。

アーメンガード、はっと身を起す。

アーメンガード「いけない、院長先生だわ」

セーラ、耳をすまし、微笑で首を振る。

セーラ「大丈夫、ベッキーよ……お隣りのベッキーが帰って来たのよ」

アーメンガード「えっ……」

木靴の音が拡大し、やがて、隣室に入る扉の音が

する。

セーラ「（囁く）間もなく、合図がある筈よ」

アーメンガード「えっ……」

セーラ「シィッ……」

——その時、隣室からコツコツと壁を叩く音。

セーラ「（低く）ほら、ね」

アーメンガード、ほっと頷く。

セーラ、壁をコツコツと叩き、応える。

セーラ「ベッキー……私、元気よ」

17

同・ベッキーの部屋（夜）

大きく頷くベッキー——

ベッキー「では、お寝みなさいまし、お嬢様」

寝間着をとり、着換えにかかる。

18

同・屋根裏部屋（夜）

セーラ、アーメンガードに微笑を向ける。

セーラ「（低く）ね、こう云った訳なの」

アーメンガード「素的！……まるで電信みたい」

セーラ「シイッ……」

アーメンガード、首をひそめ、改めて屋根裏部屋を見廻すと、囁く。

アーメンガード「でも、セーラ……あなた、こんなお部屋で暮して行けるの？」

セーラ「え……」

アーメンガード「暗くて、なんだか牢屋みたいなのに……」

セーラ、微笑で答える。

セーラ「ええ、なんとかやって行くつもりよ……ほら、前に話した事あるでしょ。フランスの王妃、マリー・アントワネットのこ

と……」

アーメンガード「ええ、憶えてるわ……フランス革命の時、タンブル僧院の中に捕えられたけど、アントワネットは、最後まで王妃の威厳を失わなかったのでしょう」

セーラ「まあ、アーメンガードったら、よく憶えていてくれたのね」

アーメンガード「勿論よ。私、あなたが話してくれた事なら、全部憶えてしまったわ。だってとても面白かったんですもの」

セーラ「有難う、アーメンガード……例え、ここが牢屋みたいでも、私、変ったり、くじけたりしないわ。だって、私には、親友のあなたや、お隣りにはベッキーもいてくれるんですもの」

19 同・ベッキーの部屋（夜）

思わず高くなった隣室の声に、ベッキーが怪訝にベッド

から起上り、壁に耳を寄せる。

20

同・屋根裏部屋（夜）

アーメンガード「ね、セーラ、私、これからも、夜、時々ここへ来てもいい？」

セーラ「勿論よ……但し、院長先生に見つからないようによ」

アーメンガード「ええ……あ、忘れてたわ」

アーメンガード、木箱に行くと、置いてあった石板を持って来る。

アーメンガード「これ、あなたが勉強するのに要ると思って持って来たの」

セーラ「まあ、アーメンガード……」

アーメンガード「セーラ……私、もっとあなたに勉強を教えて貰いたいの……もっともっとあなたとお話がしたいの…

……いいえ、もっともっともっと、あなたと親友になりたいのよ」

セーラ「有難う、アーメンガード……私、こんな運命になって、ひとつだけ強く判った事があるの」

アーメンガード「えっ……」

セーラ「辛いめにあうと、はじめて人の気持がよく判るようになるんだって……私も、それであなたが、どんなにいいお友だちだったか、本当によく判ったのよ」

アーメンガード「セーラ……」

セーラ「さ、もう部屋に帰らなくては……ここへ来た事は、誰にも秘密よ」

アーメンガード「ええ、判ってるわ、セーラ」

21 同・屋根裏部屋の前（夜）

扉が開き、燭台を手にしたアーメンガードを送り出して来るセーラ、共に階段へ。
隣室の扉が開き、見送るベッキー、ほっと友情回復を喜ぶ微笑を浮べる。

22

同・三階の廊下（夜）

奥の扉が開き、出て来るアーメンガードとセーラ――はっと立停る。
――ふと行手に立ち、唸るシーザー。
セーラ「シイッ……」
――シーザー、穏和しく尾を振る。
セーラとアーメンガード、そっと進む。
――灯りの洩れるミンチンの部屋から咳。
二人、びくっと立停り、そっと階段へ。

23

同・二階の廊下（夜）

セーラと来るアーメンガード、そっと部屋のドアを開ける。

―― 寝静った室内。

セーラ「（囁く）じゃ、お寝み、アーメンガード」

アーメンガード「お寝み、セーラ」

アーメンガード、ドアの中に消える。

ほっと大きく吐息をつくセーラ ―― その足許で、シーザーが甘えて鳴く。

セーラ「シイッ……」

24

同・屋根裏部屋（夜）

短くなったローソクの灯火の下で ―― アーメンガード

の置いて行ってくれた石板に、石墨でフランス語（例えば、mon père、）を書いてみるセーラ。

セーラのN「私は、重なる辛さの中で、思わずアーメンガードに冷たく当ってしまっていたのでした。でも、アーメンガードこそ、唯一人変らないでいてくれた私の本当の親友だったのです……」

（第十四話　終）